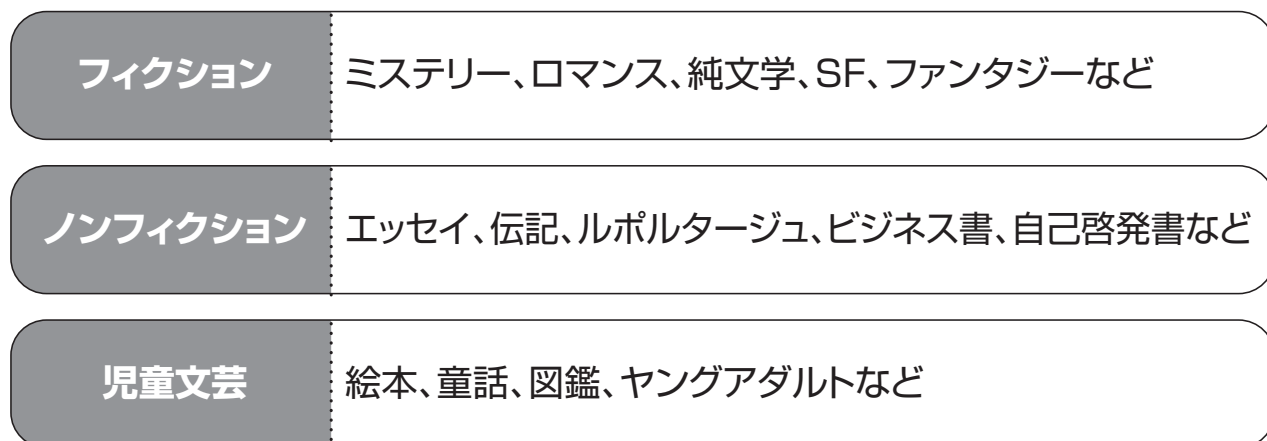
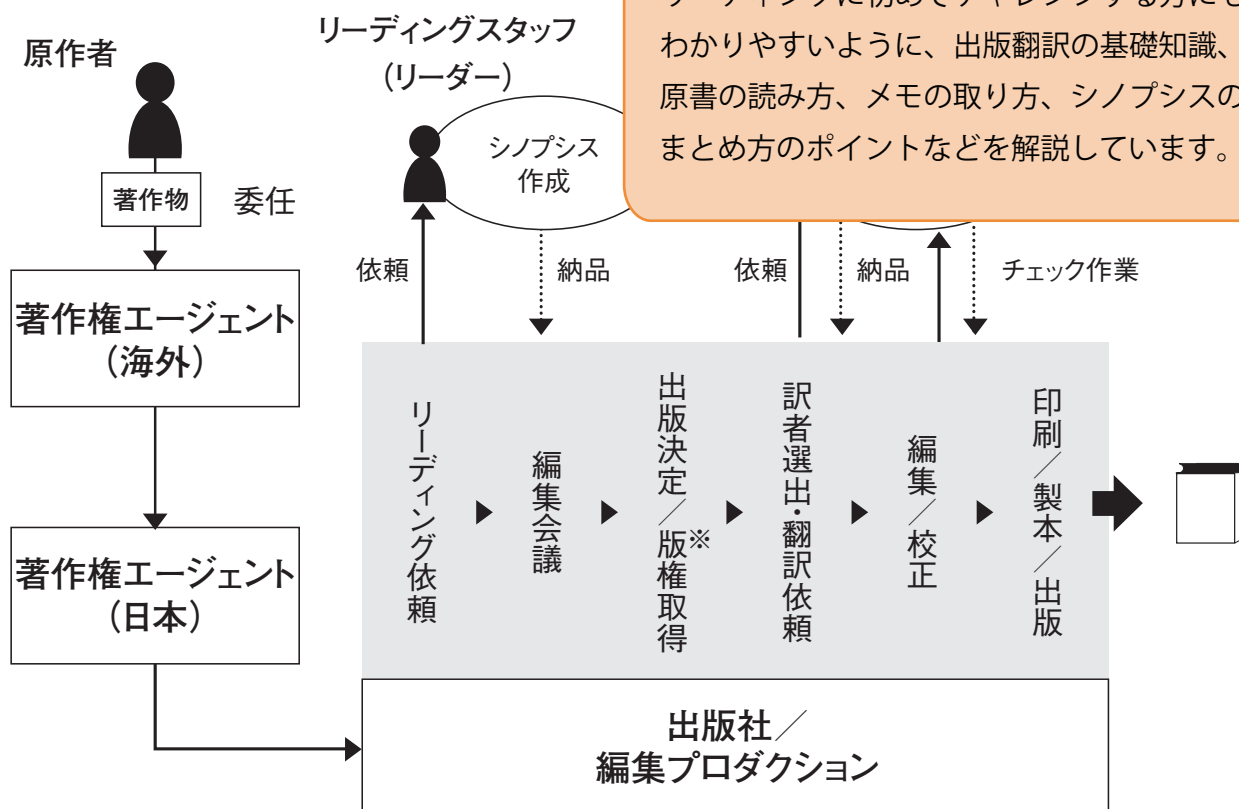


■ 出版翻訳の基礎知識

出版翻訳とは、海外の著作物を日本で出版することを目的に行われる翻訳です。出版翻訳の対象となる著作物は、主に以下のジャンルに分かれ、日本で翻訳出版されるまでの流れは下図のようになります。



● 出版翻訳の仕組みと仕事の流れ



※版權とは？

出版社が主に著作権エージェントを通じて取得する出版権のことを、通称「版權」と呼ぶ。

■ リーディングの仕事

リーディングとは、原書を読み、あらすじや感想・評価をシノプシス(またはレジюме、こうがい梗概とも呼ばれる)にまとめる仕事で、主に出版社や編集プロダクションが、翻訳者や翻訳学習者に依頼します。また、リーディングを行う人をリーディングスタッフ、またはリーダーと呼びます。

あらすじ、評価、類書との相違点、日本のマーケットに合う作品かなどをまとめたシノプシスをもとに、その本を出版するかどうかを検討するので、リーディングは非常に重要な仕事です。また、出版社からは「シノプシスには、作品の理解力や文章力が如実に表れるので、将来翻訳を依頼するかどうかのひとつの判断基準になる」という声も聞きます。

リーディングの経験を積むと、原書の構造やストーリーの流れ、著者のメッセージなどを正確につかむ力が向上しますので、翻訳も上達していきます。

■ 出版市場の動向を知ろう

出版翻訳やリーディングの仕事をするには、市場の動き、各出版社の傾向などを知っておくことが大切です。こうした情報を手に入れるには、主に以下のような手段があります。

①書店に赴く

書店の売り場の様子をじっくり観察すると、出版社や書店の動向を知ることができます。たとえば、目立つ場所に平積みになっていれば、今売れ筋の本ということになりますし、ポスターやポップを見れば、出版社や書店が力を入れている本がどれかもわかります。

また、先週平積みだったものが、今週は棚に1冊しかないといったように、書店の商品展開はめまぐるしく変わります。そのため、書店での取扱期間が長い書籍はよく売れているということになります。こうした本の売れ行きについてもチェックしておきましょう。

■ シノプシスのまとめ方

シノプシスを作成するにあたって重要なことは、編集者がその作品を翻訳出版するか否かの判断材料にできるよう、作品の内容を正確かつ簡潔に伝えることです。客観的に読んで、日本で翻訳出版する際にマイナス要素になると感じた点があれば、具体的に書くことが求められます。

●シノプシスに盛り込むこと(一般例)

- 原題
- 訳題(自分なりに検討してつけた仮タイトル)
- 出版社名
- 出版年(初版が出た年)
- 著者名
- 著者のプロフィール

原書に掲載されている情報や、インターネットなどで調べてわかることを併記。

たとえば、代表作や日本で翻訳出版された作品の情報、受賞歴、本国での評価など。

- 総ページ数
- 概要(本の背表紙にあるような作品の簡単な紹介文)
- 目次(ノンフィクションのみ)
- 主な登場人物(ビジネス書や実用書などの場合は不要)
- あらすじ

シノプシスを読んだ人がストーリーを正しく理解できることが大切。読み手への伝わりやすさを優先するため、ストーリーの順番を多少入れ替えても良い。また、一人称視点で書かれている作品のあらすじは、一人称視点でも三人称視点でも構わないが、どちらの視点で書かれた作品なのか、シノプシスに含めておくと良い。

• 所感

感想だけではなく、市場性、類書との比較、ターゲットとなる読者、そのほか特記事項などあれば盛り込むと良い。

リーディング講座

ノンフィクション

NONFICTION

●執筆講師

夏目 大

Dai Natsume

翻訳家。「人類が絶滅する6のシナリオ
もはや空想ではない終焉の科学」「フェ
イスブック 子どもじみた王国」(河出書
房)、「オリバー・ストーンが語る もうひとつ
のアメリカ史 3 帝国の緩やかな黄昏」
(早川書房)など訳書多数。

Ⅱ ノンフィクションというジャンル

ノンフィクションと一口に言っても非常に幅広いので、一言で言い表すのは難しいのですが、一応、「事実(正確には、著者が事実であると信じていること)を書く」ジャンルと言え間違いはないでしょう。また、本によって程度の差はありますが、「何が書かれているか」の方が「どう書かれているか」よりも重要なジャンル、と言っても良いかもしれません。

基本的には、書かれている内容が興味深く、面白いものが良いのですが、「興味深く、面白い」という言葉の意味は実に様々に変わり得るので、そこが難しいところです。「興味深く、面白い」と聞いて最初に思い浮かぶのは、「誰も知らなかった?」「驚愕の?」といった類のセンセーショナルなものだと思います。「えっそんなことが!?!」「全然知らなかった!」と思わせるような本は、確かに多くの読者を獲得できるかもしれませんが、中には誰もがよく知っていること、誰もが思っていることを書いているのに面白い、という本もあるのです。逆に、自分がよく知っているからこそ、日頃思っているからこそ、「よくぞ言ってくれた!」という気持ちがはたらくこともあるからです。「最近、大人になっても独立しないで親の家に居続ける人が多いな...」と皆が漠然と思っている時に、そのことについて

ジャンルの特徴、読んでおきたい参考図書、執筆講師のアドバイスなどが書かれています。「ノンフィクション」というジャンルの理解を深めてから、課題作品を読み始めましょう。

「道路並行して延々と続く『ノンフィクション』」なる新語を生み出して大ヒットした本もあります。人間の「知っていると言われるのを喜ぶ」という心理は、自分の住んでいる町や自分の知り合いがテレビに出ているとつい、注目してしまう、ということなどにもよく現れています。本にも同じようなことが言えるのです。一見、遠い見知らぬ土地について書いた本の方が面白そうなのですが、実際には自分の住んでいる土地についての話の方を喜ぶ人も少なくありません。

ノンフィクションのテーマはとにかく多種多様です。伝記など「人」にスポットをあてたものもあれば、ある事件について掘り下げる、というようなものもあります。自然科学、政治、経済などが主題になっているものもあるでしょう。興味本位のものもあれば、啓蒙的なものもあります。虚構ではないというだけで、ほとんど小説のような文体で書かれているものもあれば、淡々と事実を羅列しているようなものもあります。相当な「懐の深さ」がないと対処するのは難しいはずです。「懐の深さ」というのは、知識の幅、量ではありません。後で述べるように、本を読んでいる、ということも重要ですし、自分なりに日頃からかなりものを考えていなくてはなりません。